

等友

S
60
10
1生

〒111-0041
台東区元浅草
2-10-17
3841-2844
真宗大谷派
勝龍山
等覚寺
住職
朝倉創



境内のビオトープに咲く姫スイレンの花

令和元年10月
第108号
責任編集
朝倉 翔

自分の番 いのちのバトン

父と母で二人
父と母の両親で四人
そのまた両親で八人
こうしてかぞえてゆくと
二十代前で 千二十四人
二十代前では――?
なんと百万人を越すんです

過去無量の
いのちのバトンを受けついで
いいまここに
自分の番を生きている
それが
あなたのいのちです
それがわたしの
いのちです
みつを

住職から一言

いよいよ今年も報恩講の時期がやって参りました。本山東本願寺（京都）では毎年11月22日～28日（親鸞聖人ご命日）に勤まります。末寺ではその時期を外して勤まるわけです。ちなみに等覚寺では10月の第四週日曜日に長きにわたって報恩講を勤めて参りました。浄土真宗の行事において一番大事にされてきた法要であります。近年各お寺さんから「お盆やお彼岸には参詣者が集まるけれど、肝心の報恩講は少ない・・・。」という嘆きの声が聞こえます。ご多分に漏れず、わが等覚寺においてもそのような傾向にあります。そこで少しでも多くの方に真宗の教えをお伝えしたい、興味を持つていただきたいという願いから、報恩講に私が出会った素晴らしい方をお迎えし、わかりやすいご法話をいただくこ

とになりました。詳しいことは同封したチラシをご覧いただき、ぜひ足をお運びください。お待ちしております。



本山での報恩講の様子

行事報告

◎盂蘭盆会

ご先祖さまから繋がっているいのちのご縁への感謝を胸に、盂蘭盆会法要を七月にお勤めいたしました。簡単ではございますが、住職の法話をご紹介させていただきます。

今日はよく来て下さってる方はお気付きになられてるかと思いますが、一人足らないんですね、お坊さんが。一番お坊さんらしい髪型をしたうちの父が、今日はちょっと不在でして。人生には坂が三つある、というお話を聞いたことがありますか？若い時なんかは、上り調子で何をやつてもうまくいくという、上り坂。やっぱり人生の中では、病気になつてしまつたり何をやつてもうまくいかない時期、

そういう何かよくないことが起ころる時期、「これが下り坂。それでもう一つ坂がある。「まさか」という坂です。一番会いたくない坂ですね。実はうちの父が二ヶ月前の五月十八日に仕事から戻ってきた時、ちょっとおかしいなど。なんかめまいもするし、気分が優れないと言い出しまして。実はそのときに脳梗塞を起こしてたんですね。延髄という脳幹の一番奥のほうの部分に脳梗塞があつて。結局その日から入院をしまして、今も入院中ですが、七月十九日におかげさまで退院予定になりました。リハビリをここ一ヶ月半くらいずっと頑張つていまして、徐々に歩行もできるようになつてですね。延髄というのが、物を飲み込む力とか、しゃべる声帯の部分の筋肉をつかさどつているらしくて、いつもかすれた声になつてますけれども、本人はいつかまたゴルフをしたいんだという目標に向かつて歩んでいるところです。本人としては元気にな

つた姿を早くお見せしたいということを言つておりましたので、また報恩講とかごあいさつできたときにはおかえりと声を掛けていただくと喜ぶんじやないかと思います。

その「まさか」ということですね。よくお参りに来たご門徒（お檀家）の方々からも、倒れられたりとか、何か病や、事故にあつたりとか、そういう話を聞いて、この前あんなにお元気だったのに、驚くことはよくあるんですね。ですから、ああそういうこともあらんだな、と知つてはいたんですけども、本当にまさか自分の周りでそういうことが起こるなんてという思いがどうしてもそのときにあるわけですね。本当にそのことをいま一度知らされた出来事でありました。

よく一般的には死というものの、これを縁起が悪いといいますか、あまり語りたがらないですよね。自分の命が終わっていくこととか、自分の親が命を終える時にお墓のことをどう

したらいいかとかありますけど、なかなかそれを元気な時にお互い言い出せなかつたりしますよね。口にするのが何かはばかられる、そういうことがあります。

テレビなんかでも、例えば保険会社のCMでこのことを何ていうかご存じですか。はつきり言わないです。「もしもの時」とか、「万が一」。もしもの時も安心ですとか、万が一のことが起こった時にこういう保険がありますよって。でも私たちはそんな一万分の一の確率で死ぬわけじやないんですね。本当に死というのは生と隣り合わせ、人間の身体でいえば毎日生まれてくる細胞もあれば死んでいく細胞もいっぱいあるわけです。たまたま今日命が続いて寝ていくことができて、たまたま明日起きられるだけで、そういう私たちの命の姿があるというのを、どうも忘れがちになつていてるのかなということを感じます。ですから、少なくとも今回の父の件で思

つたのが、自分自身がこの命を今という瞬間の延長で考へてゐる、ということです。今日、明日、一ヶ月後、半年、一年、五年、十年。

こういうふうに命の長さをこちら側からの延長でしか考へていません。だからまさかということが起こった時に、はたと、そうじやなかつたんだと気付いて慌てるわけです。

浄土真宗を開かれた親鸞聖人が生きている時も、いろいろなことが起きました。平均

寿命が五十数歳の時代でしたからね。親鸞聖人が八十八歳の時に大飢饉が起ります。食べるものがなくて老若男女みんな命を落としていく。そんな大飢饉の時にお弟子さんから、この悲惨な状況はこれからどうなっていくのですか、と聞かれたそうです。すると親鸞聖人はお手紙で「生死無常のことわり」という言葉でお答えしているんですね。命というものは無常、常なものじやないんだよ、いつか

終わつていくものだよ、と。ことわりといふのは道理ですね。そういうふうに決まつてゐる、そしてそのことを阿弥陀さんから私は教わつてます、だから大飢饉が起こっているのは悲しいことではあるけれども、そこに対しても特段驚くことではないんだよ、とお答えしているわけです。でもなかなかこの生死無常、命はいつ終えても不思議でない、ということを意識するのは大変難しいなど感じました。

今日はお盆ですから先にお浄土に還られたご先祖の姿をしのんでお墓参りされたかと思いますが、命のつながりという意味で考えますと、このお寺の十八代目にあたる僕がここにいるためには、十七代さかのぼると十三万千七十二人のお父さんお母さんがいる。その方々のおかげで僕が存在しているということなんですね。もちろん皆さんもそうです。ご先祖どなたか一人が欠けても、今の皆さん

は存在してないんです。ですから、命というの親からいただいたというイメージはできますけど、もつともつと長いつながりや歴史の中で私たちの命が存在していったことが分かっていただけるかと思います。また、例えれば僕と長男で言えば、親であり子であるわけで親子の関係です。あとは僕と妻、夫と妻という関係だと、学校でいえば先生と生徒とか、いろいろな形のつながりの中で皆さん生きているということも言えます。

今日は命のつながりということをテーマに話しているんですが、それに関連してお淨土にいる鳥をご紹介したいと思います。お淨土には鳥がいくつか飛んでいるというお話があるんですが、その鳥の一つに共命鳥（ぐみようちょう）という鳥がいます。今日はちよつとこの鳥の話をさせていただきます。この鳥はお淨土で一日に六回美しい声で鳴くそうで

す。美しい声で鳴いてその声を聞いた者は、三宝（仏、法、僧）にあらためて帰依しようという気持ちになるという、大変ご利益のある鳥だと言われています。この鳥は、実は生きてる時はヒマラヤ山脈の方にいたようです。そしてどういう特徴をしてたかっていうと、一つの体に頭が二つあつたんです。それぞれの頭はカルダとウバカルダという名前だつたそうなんですが、いつもけんかしていたそうなんですね。何でかというと、自分の方がより美しい声や姿をしているとお互が思つて、主張しあつてけんかをしていた。例えば右のほうへ飛んでいこうと思つても、一方はいや左へ行きたい、休もうかと思つても、いやいやおなかすいたからまだ飛んでいたいと、けんかばかりしていた。



要はもう真逆だつたそうなんですね。

そんな時に、いよいよこのウバカルダのほうが、カルダがいなければいいのにと思い始めるわけですね。自由になれるんだろうなと。しまいにはもうカルダを殺してしまえという考えが出てきます。毒の実を見つけた時に、カルダは毒だと気付いてなかつたので、「あれおいしそうな果物だから食べようよ、先にお前から食べていいぞ」とカルダに言います。それを聞いて、カルダは喜んで食べるわけですね。そうして少し後にカルダが苦しみだして毒が入つたことに気付くわけですが、「これは大変なことになつた、でも、これでよかつたな」とウバカルダに苦しみながら言つたそなです。ウバカルダが理由を聞いたところ、「いつもお前とはけんかしてた。でも後々よくよく考えると正しいこともよく言つてくれてたんだ、それによつて救われたことも実は何度もある。だからもし自分が死

ねばウバカルダ一人になつて正しい道をずっと君は一人で歩んでいけるよ、だからよかつたと思える」と言つて死んでしまつたんですね。それを聞いたウバカルダが、これはカルダにとんでもないことをしてしまつたと気付きます。ですが、気付いたはいいんですが、皆さんもお気付きのとおり片方の口から入つて飲んだら結局同じ体で消化するわけですから、ウバカルダも間もなくして毒によつて死んでしまうわけなんですね。ただ、死ぬ間際ににそういう大事なことに気付けた。要は、いつもけんかして本当に憎んでいた相手だけれども、この相手がいたからこそ自分も生きれていたんだ、ということを。ですからお淨土へ行くことができたそうです。そして仏さまは共命鳥に対して、「最後に気付いたことをお淨土で皆さんに説きなさい」と言われたそです。ですからお淨土での共命鳥の鳴き声がどういうものかというと、「他を滅ぼす道

は己を滅ぼす道である、他を生かす道は己をも生かす道である」というものだと伝わっています。他を滅ぼそうと思ったら結局自分も滅ぶんだよ、逆に他を生かそうとすれば自分自身も生きていけるんだ、ということをお淨土で説いているという鳥なんですね。

どうでしょう、この共命鳥というのはどうやら私たちの姿にも通ずるところがあるのでないかなって思うんですね。例えば親子とか兄弟の関係とか、そういう本当に近しい仲でも、時に相手をあやめてしまうこともありますし。親の遺産相続で仲良かった兄弟が今じゃ口も聞かないなんて、よくありますよね。カルダとカルダのような関係になってしまふのは私たちではないでしようか。だからこそ、このお話からいただくべきことは、そうやってどちらかが正しい正しくない、というような立場でいたら、相手を傷付け、結局自分も

傷付くことになるということです。子どもは親に育てられる、それは確かに事だと思うんですが、実は親も子どもによつて育てられている。そういうところに気付いたときに、相手という存在があつての自分なんだ、自分だけが正しいんじゃなくて、自分というものは周りの方々によつて自分でいさせてくれてる、自分という生き方ができているのは周りの方々がいるからなんだ、という本当の自分とということに気付けていけるんじゃないかと思うんですね。これは人間関係だけではないと思うんですね。皆さん生きていく上での出来事もそうだと思います。いいこともありますよね。悪いこともある。まさかという出来事も実は、私自身を育ててくださる大事なご縁なんだということですね。何で私がこんなひどい目に遭わなきやいけないんだ、と愚痴が出ることも、実は私を育ててくださる、ちょっと仏教的な言

い方しますと、生かしめる大事な出来事であったのです。そういうところに立つていけば、本当にこの命が意味のある輝いたものになつていけるんじゃないかと思うわけです。そうでなければ愚痴ばっかり出る寂しい生き方になっちゃいます。やっぱり晩年になつたら、みんな年には勝てません。病にも倒れることもあれば、いつか死というものが来る。それがネガティブなものだと考へていると、ああ嫌だ嫌だ、そんな愚痴ばっかりで死んでいくことになる。でも年老いるわが身も、こうやって不自由になつてくるけれどもこれも命の一部なんだ、周りの人たちにこういうふうに年老いていくんだよ、と見せてあげることができるんだとかね、そういうふうに考えていいければ、尊いこの命というものが見えてくるんじゃないかなと思います。今日はお盆にあって、皆さまがお参りくださって、ちょっと変わった鳥のお話を通じて、仏教の

お話をさせていただきました。全ての仏教のお話というのは私たち人間のあり方のことなんですね。人間のあり方をこうやって二千五百年も前から教えて下さつて。そういうことを聞く機会をこれからも大切にしていただきたいと思います。

（釋 創龍）

般若心経 唱えちゃいけないの？

一般的にお経と言うとよく出てくるものが般若心経ですね。通販雑誌などを見ていても般若心経グッズを見かけることもあるくらいです。そんな般若心経ですが、浄土真宗では唱えないってなんとなくご存じだった方もけつこういらっしゃるのではないでしょか。ですがその理由までちゃんと答えられる方は少ないんじゃないかなって思います。そこで

今回はそのあたりを簡単に紹介していきたいと思います。

般若心経に書いてある内容がどういうものなのかというと、仏教の大切な教えの一つです。すべての物事は不变のものは無く、かならず移り変わっていくという「空」の思想や、

さとりを得て彼岸（浄土）に至るにはどうしたらよいかということなどが、観音さまからのお言葉として短く簡潔に述べられています。

それに対しても、浄土真宗の教えでは、自分の力では難しい修行を成し遂げたり、仏教の教えを実践して悟りを得ることがなかなかできない一般的な私たちでも、阿弥陀如来のお力によつてお浄土に救われるということを喜び、感謝・安心して今を精いっぱい生きていこうというようなことが言われています。この二つを比較すると、内容が合わない部分が結構ありますよね。観音さまと阿弥陀如来、自分の力で悟りを得るのか（自力）、阿弥陀

如来のお力に救われるのか（他力）。だいぶ違うのが分かっていたらけるかと思います。ですから私たちは般若心経というお経を唱えていいのです。つまり、浄土真宗では般若心経を唱えちゃいけないのではなく、唱える必要がないというわけです。

浄土真宗に般若心経が無いならどんなお経があるのかといえば、三つの大切なお経があります。それは「大無量寿経」「觀無量寿経」「阿弥陀経」の三つ（浄土三部経といいます）です。これらはすべて阿弥陀如来に関する事が書かれているお経になつていて、この三部経を必要な時にお唱えしているわけです。ご興味があればぜひこの三部経も読んでみて下さいね。



参加者募集中！

備忘録　～お焼香作法～

○お焼香のタイミング

お勤め中に声が掛かりますので、それまでお待ちください。順番には決まりはないので、施主の方から前に出て「お焼香ください」

十一月十日～十二日
今年は京都のご本山に上山します。一泊二日でご本山奉仕団に参加（本山の同朋会館に宿泊）二泊目は市内ビジネスホテルに宿泊して最終日は市内観光を楽しむ予定です。（京都へは新幹線、市内はバス移動）

※十月中旬締切

○お焼香作法

・焼香机の前に進み、合掌せずに「本尊を仰ぎ見ます。赤い香盒（香入れ）の蓋を開けて香盒の右に置きます。

・右手でお香を二回、香炉にくべます。（お香を額に頂くことはしません）お香の乱れを指先で直してから「南無阿弥陀仏」を称えて合掌礼拝します。

・自分の後にお焼香する方がいれば蓋はそのままにし、最後であれば蓋を閉めて自席に戻ります。



○勉強会

仏教入門＆なぜなに真宗

毎月第一日曜日（行事の月以外）

午後二時～

場所 等覚寺

備忘録　～法事の準備～

○まずはお寺へ日程連絡

回忌の確認をし、ご家族で法要希望日をお決めになりお早めにお寺へ連絡ください

○当日必要なもの

・お布施(ご先祖さま合同で実施する場合は、
「ご先祖さま毎に包みを分けて下さい」)

・お花代(本堂にお飾りする
お花代で、一万円の実費)

○ご希望によってお持ちください

- ・お供物
- ・過去帳やお位牌
- ・遺影(小さくもの)

○服装は華美でなければ平服でも結構です。

(ご参加される方同士でお話しされてお決めください)

※お寺へお包みいただく表書きは全て「布施」と書いて
いただければ結構です。浄土真宗の場合は「読経料」や

「ご靈前」という言葉は用いません。

備忘録　～お葬式について～

○事前のご相談もお気軽に

亡くなられた後ではバタバタとしてゆづくり
検討する時間がありません。お寺にご連絡
いただければ葬儀までの流れなどご不明、
ご不安な点のご説明もさせていただきます。

○葬儀の場所

基本的にどちらでも伺わせていただきます。
遠方でも泊まりがけでお勤めさせていただい
ておりますので気にせずにご依頼ください。
また、可能な方はぜひお寺での葬儀を。故人が
生前ご縁のあつた等覚寺の本堂で、あたたかく
お「そかな」葬儀をすることができます。

○葬儀の布施

「ご時お預かりする布施は通夜葬儀のお勤め
の対価ではありません。亡くなつた時を「縁に
お寺の護持のためお納めいただくものです。ど
うぞお気軽にご相談ください。

備忘録 ヘビ納骨について

〇、納骨のみはお受けできません

一般的の墓地を「利用の場合、浄土真宗の教義に則つて、葬儀式をお勤めしてからの「納骨となります。（永代供養墓は除く）

式のやり方の「希望等」相談に乗れる部分もありますので、必ず火葬前に「連絡ください。

ご披露

等友へのご懇意

高橋健治様

いつもご支援いただきまして、誠にありがとうございます。この等友誌や等友会は、こうしたご支援から成り立っております。

編集後記



こんにちはー。釋翔雲です。元号が令和に変わり、初めての等友の出版となりました。いつも変えずに書きっぱなしだった元号の部分を全て令和に書き変える作業が、なんとも不思議な感覚でしたね。平成に変わった時は小学一年生でしたから。さて、お彼岸も明けましたがまだまだ暑い日が続いていますね。暑さ寒さも彼岸までという言葉が昔からあります。気候も変わってきているのでしょうか。十一月には旅行会がありますが、今回は初めて本山の奉仕団へ参加することになります。いつもは温泉旅館だったのでだいぶ色が違いますが、奉仕団としての上山は僕も初めてなので楽しみです。どんな旅行会になるのでしょうか。次回の「報告」を期待下さい！

令和元年、二年行事予定

十月二十七日（日） 報恩講

十一月十日～十二日 等友旅行会

令和二年

一月二十六日（日）

新年会法要

三月二十日（金）

春季彼岸・
永代経法要

三月十三日～十六日 お盆

七月十二日（日）

盂蘭盆会法要

令和二年年回表

一周忌 令和元年

三回忌 平成三十年

七回忌 平成二十六年

十三回忌 平成二十年

十七回忌 平成十六年

二十三回忌 平成十年

二十七回忌 平成六年

三十三回忌 昭和六十三年

三十七回忌 昭和五十九年

三十九回忌 昭和五十三年

四十三回忌 昭和四十九年

四十七回忌 昭和四十六年

五十回忌 昭和二十六年

七十四回忌 昭和二十年

百回忌 大正十年

◎お気軽にご参加ください。